

青年期の心理的特徴と近年にみられる変化

弘前大学 平岡 恭一

青年期の心理的特徴について従来言われてきたことを、青年期を表す標語（キーワード）とともに整理すると、次の諸点があげられる。

1) 「周辺人（境界人）」、「第二の誕生」、「人格の再構成」などの標語が示すように、青年期は移り変わり（過渡期）あるいは生まれ変わりの時期である。すなわち、子供時代までの自分が一旦そこで途切れ、新しく大人に生まれ変わるという、不連続性を示す時期である。

2) 「否定期」、「第二反抗期」、「疾風怒濤」など、青年期には否定的反抗的言動が多くなり、感情的に揺れ動きが激しく安定しない。ひとつ間違うととんでもない方向へいってしまいそうな、精神的危機の時期である。

3) 「自我の発見」、「自我同一性の確立」などの標語が意味するのは、青年期が自己を確立する時期であるということである。青年は自分の中心に自らを見つめる目を発見し、そのことにより、より確かな自分を確立しようと努力し始める。青年期全体にもわたる長い彷徨の末に、自分なりの価値観や職業を選択していくのである。

従来青年心理学は、概ね以上のような観点から青年をとらえようとしてきたが、それほど間違った見方はなかったようである。現在でも基本的にこの図式は変わっていないが、近年これが当てはまらない若者が増えてきたといわれる。そのような変化には、次の諸側面があげられる。

1) 青年期の始期が早まり、周期が遅くなってきている。つまり、青年期が長くなってきた。始期が早まってきたことは、思春期における急激な心身の発育及び性的成熟の時期が早まってきたという、いわゆる発達加速現象を反映したものと考えられ、次のような諸問題を提起している。まず第一に、小学校高学年です

で青年期の精神的特徴が現れる場合がある。特に女子において早く、まだ子供だと思って安易に体に触れたり、身体測定の際に適切な配慮を欠くなどは、子供の心を傷つけてしまうかも知れない。第二に、児童期が短くなっている可能性がある。発達心理学的には、従来から「ギャングエイジ」などといわれるように、小学生の時に友人関係を通じて、人間関係の技術など社会性が発達するといわれてきたが、児童期が短くなると、遊び場がないなどの環境の変化と相まって、社会性が十分に発達しない事態が生じうるであろう。

一方青年期の周期が遅くなってきた点については、大人になるまで時間的余裕がでてくるはずであるから、じっくりと自己を完成させてゆけばよさそうなものであるが、昨今の受験戦争などは、逆に子供たちを急がせすぎ、あまりにも早くルールに乗せようとしているように思われる。

2) 青年期が以前ほど不連続的でなくなり、児童期から連続的に大人になっていく青年が増えてきた。加藤（1987）は、児童期から青年期への移り変わりが連続的であると感じている大学生の手記とともに、この傾向を協調している。

3) 青年期は以前考えられていたほど危機的でなくなってきた。例えば自殺率の統計などをみても、以前は青年期の頃にひとつのピークがみられたが、最近ではみられなくなり、むしろ中年の頃にピークが移っている。思春期の体の変化、特に初潮の受け止め方に関する調査研究の結果も、以前より否定的でなくなっていることを示している。これには、近年の性教育に対する熱心な取り組みの成果も反映しているであろう。

4) 自己確立の努力をしない青年が増えてきた。大学で学生相談に当たっているカウンセラーによると、この頃の学生はアイデンティティ（自我同一性）につ

いて以前ほど語らなくなってきたという。明るく、軽くという現代学生気質を表しているのであろうか。

近年同一性地位に関する研究が注目を浴びている。これは、自我同一性に関わる様々な段階を想定して、青年を分類しようという試みである。その中には同一性を達成した段階、拡散の状態、モラトリアム、などと並んで、早期完了あるいは権威受容といわれ、親の期待や既製の価値観を悩まずにそのまま自分のものにしてしまうグループがある。弘前大学生を対象とした調査研究によれば、多少なりとも早期完了の特徴を持つ学生が20%程度存在する。この数字は従来の青年観に照らすと、かなり高いもののように思われる。

最後に、以上のような変化に関連して、筆者の研究室で行われている調査研究の結果の一部を紹介したい。

まず、青年期の延長について、中学、高校、大学生の、すなわち青年自身の意識を通して調べてみた。1973年の調査（京都大学）結果と1991年の結果（当研究室）を比較すると、青年期の始期の認知はすべての学年で早まっており、終期についても中学と高校で遅くなっていた。青年期の延長は、青年自身がどう感じているかという点からみても、だいたい確認されたといえよう。

さらにわれわれは、青年期の不連続性と危機性を、量的に調査する試みを始めている。連続、不連続の問題は、量的には、発達速度に関わるのであって、例えば非常に短期間に大きな変化が生じたとき、われわれはそこに不連続性を見いだすのではなからうか。このような観点から、子供、青年、大人の時期における一般的な発達速度を角度で表してもらう問を大学生に与えたところ、青年期の平均角度が、それ以外の時期よりも大きかった。一方危機性については、「疾風怒濤」という標語に示唆を得、心の中の嵐の状態を風速で表してもらう問を作成した。大学生の回答を集計したところ、青年期における平均風速が、他の時期に比べて著しく大きかった。以上の結果により、青年自身の見方からとらえても、青年期が比較的連続的であり、危機的であることが確認された。今後は、何年か置きに同種の調査を行い、上述の変化の仮説を検討していきたいと思っている。

文献

加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 - その変化と多様化 誠信書房